北海道中山間ふるさと・水と土保全対策事業／北海道里づくりアドバイザー情報誌

第５号　２０１２年７月

編集・発行/北海道農政部農村振興局農村整備課
〒060-8588　札幌市中央区北３条西６丁目
TEL　011-231-4111　/　FAX　011-232-4128
E-mail:nosei.noson1@pref.hokkaido.lg.jp

里づくり

タンチョウの鳴き合い（鶴居村　服部政人氏提供）

CONTENTS

● 地域づくりリレーインタビュー
ＮＰＯ法人北海道食の自給ネットワーク　事務局長　大熊　久美子氏
「食を守ることは、食の自給力を高め、産地を守ること」

● 北海道里づくりアドバイザーレポート　　鶴居村　服部　政人氏
「鶴居村の魅力を伝える、地域づくり型観光への挑戦」

● 実践！地域づくり
ー持続可能な地域づくりとは「豊頃町の二宮地区に見る地域づくりの本質」ー

● トピックス

● ＢＯＯＫＳ　『かがり火～地域を学び、地域で遊ぶためのヒューマンネットワークマガジン～』

―人に学び、地域に学び、いまできることから始める―

「食を守ることは、食の自給力を高め、産地を守ること」
～消費者・子ども・生産者をつなぎ強い農業へ～
ＮＰＯ法人北海道食の自給ネットワーク　事務局長　大熊　久美子氏

大熊　久美子（おおくま　くみこ）氏
昭和 29 年札幌市生まれ
NPO 法人北海道食の自給ネットワーク事務局長として、大豆トラスト、小学生を対象とした食育講座、フォーラムの開催、生産者との交流ツアーなど、食と農に関する活動を行っている。
現在、農林水産省「政策評価第三者委員会」委員、「北海道中山間ふるさと・水と土保全対策委員会」委員、北海道有機農業協同組合理事、北海道食育コーディネーター、「北のクリーン農産物表示制度審議会」審査委員、「北海道農産物優良品種認定委員会」委員に就任。

―食や農に関する活動を始めたきっかけは何ですか？

活動のめざめは生活クラブ生協です。それまでは、一円でも安い食材を買い求める普通の主婦だったんです。主婦だと日々子育てに追われ、社会的なつながりが無いので、近所の主婦たちと一緒に社会の様々な問題を勉強するサークルを始めたんです。

その勉強会の講師の方から、生活クラブ生協の事を知りました。当時、長女がアトピーだったこともあり、食品添加物が入っていない食品や石けんを購入するため生活クラブ生協の組合員となりました。当時は、子どものため、家族の安全のためという想いでした。

―そこから市民活動につながっていった？

その後、生活クラブ生協の委員から理事となるのですが、私自身の関心は、家族の安全から食料の安全性、そして食料自給率の問題へと広がっていきました。安全な食べ物を作ってくれている人がいることの大切さ、国内で食べ物が作られないことの危険性に気づいたのです。生産地を大切にすることは、自分の食を守ることです。国内で安全な食べ物が確保できなければ、海外からの輸入に依存することになります。では、輸入されなくなった時はどうするのか…そこから生産地を守る活動へとつながっていきました。

―「北海道食の自給ネットワーク」設立の経緯は？

「生命（いのち）のまつり」というイベントをＪＡ青年部や大地を守る会、生活クラブ生協などの団体で開催したのですが、当時、生活クラブ生協の理事だったこともあり実行委員長を務めました。このイベントは平成八年から三年間続けたのですが、実行委員の中から年間を通じて「食料の自給率」「第一次産業を守る」活動をしたいという声があり、「北海道食の自給ネットワーク」を設立することになりました。平成十年に設立準備委員会の代表となり、平成十一年の設立後は事務局長として活動しています。

―活動内容を教えてください。

食料自給力の向上と北海道の第一次産業の活性化を目的に、平成十二年に学校給食プロジェクトと大豆トラストを始め、平成十四年には小麦トラスト、平成十六年から食育の活動をしています。

―食育に取り組まれた背景は？

当初、学校給食プロジェクトとして、学校給食の調査や地元食材を使う働きかけをしていたのですが、活動を進めるうちに、一般家庭における食のあり方に問題点があることがわかってきました。出来合いの総菜が普通に食卓に並び、子どもの朝食の欠食や食事のかわりにペットボトル飲料とお菓子を食べるなど、家庭の食は本当に危機的状況にありましたので、食育活動に切り替えました。

―岩村暢子さんの著書「変わる家族　変わる食卓」のようですね。

岩村さんの著書は、首都圏の家庭の食の深刻さを、アンケート調査により浮き彫りにした本ですが、これは、北海道にもそのまま当てはまります。食育基本法が平成十七年に施行されていますが、私たちが食育講座を開始した平成十六年は、まだ食育をどのように行えばいいのか手本となるものが全く無い状況でしたから、食の重要性を伝えるにはどうすれば良いのかを１年間試行しました。

翌年から本格的に、六月～十一月までの各月一回、計六回講座で小学三年生から六年生までを対象に開講しました。参加者が集まるか不安でしたが、道新が取り上げてくれたこともあり、すごい反響があり定員の二十四名がすぐ埋まりました。

―食育講座はどんな内容なのですか？

漁師や生産者も講師として直接教えます。現場の人から親が教えることができないことを学べるのです。生産から流通、消費、環境との関係、ゴミ

の片付け、食事のマナーなど、食に関わる全ての事を教えます。

子どもたちに一番説得力があるのは、生産現場に行くことです。有畜農家に行けば、豚小屋を見て、生まれたばかりの子豚を抱っこして、出荷直前の豚を見る。生産者から「豚は普通十年生きるけど、肉にする豚は六ヶ月しか生きられないんだぞ。」と言われると、子どもたちはガーンとショックを受ける。ここで、初めて肉になるということが分かって、「いただきます」「ごちそうさま」の意味が分かるんです。言葉だけでは分からないけど、現地で体験することにより理解できます。五感をフルに使うことで子どもに伝わるのです。

―子どもたちに変化はありますか？

生産現場では、野菜をもぎ採って、生で食べたりしますが、採れたての野菜の美味しさ、本当の味を知ることで嫌いな野菜を克服できる子もいます。

漁師さんに教えてもらいながら、魚を三枚におろして料理もしますが、子どもたちは、自分が作っておいしくできた魚料理を家に帰って家族にも作ってあげたりします。すると「うちの子が魚料理を作ってくました。感激しました。」とお母さんたちから連絡がきたりして、子どもだけでなく、家庭の食卓も変わっていきます。

―食育の取組で課題などはありますか？

前年度から続けて参加している子と今年度から新しく参加する子が混在する中で、子どもたちが常に新鮮な気持ちで講座を受けられるように工夫が必要です。

予算面でも綿密に計算して赤字を出さないよう、参加費の一万二千円で賄うようにしています。講座一回当たりに換算すると二千円ですが、参加費無料の料理教室もある中で、まだお金を払って食育をさせるという考えが一般的になっていないのを感じます。

私たちは食育の内容に規制を設けないように、たとえば食品企業に援助をお願いするという事はしないでやってきました。自立した運営は活動を続ける上でも必要な事です。厳しくはありますが、自立運営と内容の充実は常に課題ですね。

―トラストはどのような状況ですか？

消費者は食べ支えることが生産者を守り、自分たちの食を守るということという事を、生産者には消費者の方を向いた生産で食を作り支えるという意識を持ってもらいたい。そんな生産者と消費者相互の意識の共有があって、強い農業になっていくと考えて実施してきました。生産者自身もトラスト会員になってもらい、自分の小麦を使ったパンを食べるなどして消費者の気持ちを知ってもらいまいた。

平成二十三年度で小麦トラストの取組を終えましたが、十年間の取組で延べ千五百人の参加があり消費者生産者双方に意識の変化がありました。取り組んだ成果はあったと思いますし、新たなトラストのような動きも出てきていますので、こういう活動のヒントとなったのなら大きな意義があったと思います。

―トラストの取組は、ＴＰＰへの対応策にもなるのではないですか？

不況の現在、圧倒的多数の人は国産品と輸入品との価格差を気にするのではないでしょうか。地場産を買いたいが家計の状況から安い輸入食材を買ってしまう人も多くいると思います。

でも、消費者の意識は確実に変わってきています。以前は価格がすべてという所がありましたが、今は明らかに国産、地場産を求める意識になってきています。トラストのような取組が広がって行けばＴＰＰに直面してもぶれない消費者が増えていくと思います。

―最後に地域づくりとそれを支援する行政に関してお聞きしたいのですが、地域づくりのポイントは何だと思いますか？

二十年間食と農に関する活動をしてきてしみじみ分かった事ですが、やはり「人」ですね。できない理由をあげるのではなく、自分たちの地域の良い所を探し出して活かしていく、そうやって動き出す人がいるところは上手くいっています。やろうという人がいて、そういう人を育てることができるかが地域活性化のポイントだと思います。

地域にはいろいろな人たちがいるので、職業も考え方も様々な人たちが集まるとおもいしろい動きが出てきます。行政の方たちは、そういった人と人をつなぐ役割りだと思います。そして活動の効果を検証することも大切です。行政がすべてお膳立てして人を参加させても、継続はなかなか難しいのではないでしょうか。

―行政にはどのような役割を期待されますか？

行政にはたくさんの情報が集まってきますし、民間団体は現場の活動に強いです。お互いにタイアップしていろんなことができると思います。民間団体のフィールドワークからの情報を政策に活かしていただけたらと思います。是非ここのところをやって欲しいですね。

―お忙しい中、貴重なお話しありがとうございました。

優しい印象の大熊さんでしたが、食と農を守るという一環した強い信念を持ち、ＮＰＯ法人を立ち上げる行動力、人の考えや行動に影響を与えてきたこれまでの実績にただただ凄いと圧倒されるとともに、家庭の食卓事情は身につまされました。

北海道里づくりアドバイザーレポート

「鶴居村の魅力を伝える、地域づくり型観光への挑戦」

鶴居村　服部　政人氏

服部　政人（はっとり　まさと）氏
昭和 35 年大阪府大東市生まれ。昭和 54 年日本電信電話公社（現 NTT）に就職するも、平成３年北海道に移住し、標茶町の町営牧場「多和平」、鶴居村酪農ヘルパー利用組合、（株）鶴居振興公社に勤務。現在、NPO 法人美しい村・鶴居村観光協会事務局長。ファームレストラン「ハートンツリー」の経営者でもある。

里づくりアドバイザー歴二年目でありながら、その存在感と包容力ですっかりなじみの顔となった服部さん。今年度は指導員会幹事に選任され、現地研修（十一月予定）の開催地が鶴居村に決定するなど、益々の活躍が期待されています。そんな、注目株の服部アドバイザーにお話を伺いました。

■大阪から人口二，六〇〇人の鶴居村へ

服部さんは、大阪府大東市の出身で、昭和五四年に大阪の日本電信電話公社（現ＮＴＴ）に就職した。当時は、アナログからデジタルに変わろうという時代で、服部さんは機械整備の技術者として、ＡＤＳＬやＩＳＤＮなどのシステムの構築に携わり、毎日パソコンばかりさわっていた。そんな時、奥様である佐知子さんと出会う。佐知子さんは、大阪市阿倍野にある辻調理師専門学校に通っていた。佐知子さんの実家がある鶴居村を何度が訪れるうちに、服部さんは鶴居村の魅力に惹かれ、酪農に興味を持つようになった。服部さんを移住に駆り立てたのは、他にも理由があった。その一つは通勤時間だった。自宅から職場まで自転車で行けば四十分の距離を、電車利用では片道一時間半もかかっていた。電車に揺られながらこの通勤時間の意味を問うようになった。都会では当たり前のことが、服部さんには疑問になったのである。

「鶴居の自然やそこで暮らす人々の生活に触れ、人生の本当の豊かさに気づかされた」と服部さんは言う。そして、子育てに関してもその思いは波及する。「子どもたちを鶴居のような自然豊かな環境で育てたい」この時、佐知子さんも同じ気持だった。平成三年にＮＴＴを退職し、一家四人は北海道に移り住んだ。

■自分の役割は鶴居の魅力を『伝える』こと

服部さんは、標茶町営牧場『多和平』で臨時雇用として一年働き、その仕事の傍ら鶴居の酪農ヘルパー利用組合の発足に尽力した。規約の作成から事務管理まで、一切を任された。それから十七年間、利用組合の事務局として現場に出ながら酪農のノウハウを学んだのである。この間、酪農家になるという夢を抱いて鶴居村に移住してきた服部さんの気持ちが、少しずつ変化してきた。「農業がどれだけ大変なのか誰も知らないのだろうなという思いがずっとあって。農業の大変さもあるし、楽しさもある。それを誰かが伝えなければ分からないんじゃないか」そんなことを奥様の佐知子さんとずっと話していた。「将来は、五頭の牛から農業を始めてもいいじゃないか。でも今は、先に『伝える』仕事をしよう。例えば、地域おこしにしてもＰＲの仕方はいろいろある。家内は料理をしていましたが、料理もＰＲの方法の一つじゃないか。そういうもろもろのことを含めてあの丘に暮らすというのがちょうどいいタイミングだったんです。傍らに小さなお店を建てて、コーヒーを飲みながら、ケーキを食べて、農家の人が来てお客さんと交流するようなスクランブルの場所になったらいいということで、『ハートンツリー』を作ったんです」あの丘とは、鶴居村の一角にある小高い丘で、そこからは多分これがフランスの田舎の風景だろうなと思わせる美しい田園を見下ろすことができる。服部さんは、平成十一年にかねてから目をつけていたこの絶好の場所を住居と定め、隣接してファームレストラン『ハートンツリー』を建てたのである。この店は、その後地域住民の交流だけではなく、旅行者が遠くからわざわざ訪れる人気のスポットになる。そして、

キラコタン岬

佐知子さんと共同して、次々と食の魅力を発信する拠点ともなっていくのである。その一つが、『鶴居のむらレシピ』の発行である。チーズを用いた料理のレシピ集で、B五版の大きさでコンパクトにまとめられた小冊子である。鶴居の美しい酪農空間を天然のレストランに見立て、草地の上に料理を並べて見せる演出は、酪農の村独特の臭いを感じながら料理を味わっている気分にさせる。鶴居の魅力を生かした秀逸なパンフである。

次に取り組んだのが、都市と農村をつなぐグリーンツーリズムである。当時、農家の人でログハウスを所有している人やログハウスを建てたいという人が結構いたそうで、そこに目をつけたのである。服部さんのネットワークを活かして仲間が集まり、平成十五年に『鶴居村あぐりねっとわーく』を設立し、鶴居の農家に泊ったり、農業体験を行いたい訪問客の要望を受けて、連絡調整を行う体制を整えた。『鶴居村あぐりねっとわーく』の活動は、農業者の枠組みだけに捕らわれず農村地域に住む人々や学校、地域団体、行政も絡めた枠組みへと広がってきている。

■鶴居らしい観光開発とスローライフのすすめ

平成二十一年から鶴居村の様々な施設の管理とこの施設を活用したイベント企画を行う鶴居村振興公社に勤めた。そこでは、道営中山間地域総合整備事業で建設した農畜産物加工施設の『酪楽館』で製造したチーズのPRや販売促進に尽力した。このチーズは、『ＡＬＬ　ＪＡＰＡＮナチュラルチーズコンテスト』で農林水産大臣賞を受賞するなど、数々の栄誉に輝いて高品質のチーズとして高い評価を得るようになり、ペッパーを入れたチーズなど種類も増えている。

そんな服部さんの活躍が認められ、平成二十三年四月から、鶴居村観光協会の事務局長に迎えられた。鶴居のようなさほど大きくない観光協会に事務局を専任で置くことは、道東でも珍しいことで、服部さんのために設けたようなポストのようである。

今年四月、鶴居村観光協会はＮＰＯ法人化し「美しい村・鶴居村観光協会」となった。この「美しい村」には、服部さんの強い想いが込められている。「大きい、小さいということに捕らわれない。ごてごてと外からいろいろなものを持ってきて都会化しない。鶴居はこのままの良さを生かせばいいじゃないか。この丘からの景色を見てよ。フランスなんかにも負けない美しさだよなぁ」服部さんは心から鶴居村を気に入っている。

鶴居村は、日本で最も美しい村連合に加盟していて、村長を始め行政マンや住民たちの景観に対する意識は高い。

服部さんは「地域づくり型観光」を提唱する。「観光は産業の振興につながるものであるが、地域の人が関わらないと成り立たない。人が関わることで、お互いが鶴居の魅力を生み出し、活性化しながら発展していく。これが鶴居村の観光」

そして服部さんは、この美しい鶴居村の風景や食を楽しみゆっくりと過ごしてもらう『スローライフ』を提案する。一番の目的は村民に『スローライフ』を楽しんでもらうこと。そのために、フットパスの構想づくりや鶴居産ワイン醸造のプロジェクトなど、『スローライフ』に必要なアイテムを揃えつつある。ワインに関しては、昨年、十勝ワインのブドウ品種で寒さに強い『山幸』の苗木を試験栽培し、今年は欧米のブドウ畑に見られるような傾斜地に植えて、栽培面積を広げた。十年後のワイン醸造を夢見る長期プランだ。

「観光協会の服部として、自分がここに居ることでリンクを張り、いろんな事を仕組むことができる。そんな立ち位置でいたい」服部さんは、地域づくり型観光のコーディネーター役だけではなく、「おもてなしチーム」のリーダーになるという。鶴居村に訪れた人の満足度を上げ、鶴居ならではの価値を見い出してもらいたいともいう。これは経済的に直ぐ成果の現れるものではないが、「目先の利益なんて単発で楽しくないでしょ」と言い切る服部さんは、将来を見据え常に種を播き続ける。

どさんこ牧場

服部さんがずっと伝え続けていることがある。それは、こんなところに人が来たいと思うだろうかという村民の気持ちに対して、「この村は、本州や都会の人にどれほど影響を与えられるか計り知れない。そこに自分たちは暮らしているんだ」と。

最後に里づくりアドバイザーの活動について伺ったところ、「一定の方向にベクトルが行きがちな時など、指導員の方と会い、考え方が広がったり、得られるものが沢山ある。地域づくりと観光はほぼ同じラインだと思う。だから、話しをすると指導員の人はみんな熱いんだよね。」と笑う服部さん自身が、相当熱い人だと私は思うのだが。

インタビューをして一番感じたのは、服部さんの人柄の良さである。この安心感は、頼りがいのある上司といった感じだろうか。そんな服部さんを魅了し続ける鶴居村とは一体…十一月の現地研修会にご期待ください。

★★ 実践！ 地域づくり ★★

―持続可能な地域づくりとは

「豊頃町の二宮地区に見る地域づくりの本質」―

二宮尊親

■はじめに

地域づくりには、普遍的なマニュアルがなく、めざす姿も茫洋として捉えどころがない。地域づくりに関わっている人たちは、試行錯誤を繰り返しながら、地域づくりの本質を探っていると言える。そのような中、現代にもその効果が及んでいる過去の地域づくりの事例に学ぶことは非常に意義あることだと思う。それも、かなり昔に遡ることで、現代に活かせるヒントを見出すことができる。何故なら、このような事例は、そのまま持続的な地域づくりの見本だからである。

江戸時代の後期（一七八七年）、現在の小田原市に生まれた二宮尊徳は、地域づくりの権化のような人である。内村鑑三（高崎藩士・札幌農学校卒業・渡米して神学を学ぶ・旧制一高講師・宗教家）は、尊徳の壮年の社会的実践への敬意と共鳴から、著書『後世への最大の遺物』の中で尊徳のことを、「私を益し、日本の多くの人を益した。それは事業の贈り物ではなくて、生涯の贈り物を遺してくれた。」と言っている。寝る間を惜しんで中国哲学を学び、自然から地域づくりの理法を会得した尊徳の手法は、報徳仕法と称され衰退した地域を精神面と経済面から再興させた。

豊頃町役場前庭の二宮尊徳立像と歌碑

この尊徳の嫡孫にあたるのが尊親（正式には「たかちか」と読み、地元では敬意を込めて「そんしんさん」と呼んでいる）で、明治三十年（一八九七年）、尊徳直伝の仕法を引っさげ、現在の豊頃町二宮地区に入植した。

■尊親の地域づくり

尊親は、尊徳の教えである「至誠・勤労・分度・推譲」の四つを実践した。「至誠」とは一生懸命であること。「勤労」はよく働くこと。「分度」とは生活にふさわしい支出の限度を決めること。「推譲」とは将来に備えること。そして、他人のために収入の一部を譲ることを意味する。この教えを念頭におき、移住民一同が協議して組合規約が制定された。そこには、組合で行う共同作業や例会への出席、婚礼には血縁者および隣家の者以外を招かず、質素・倹約を旨とし、飲酒・賭け事を禁じる内容が記された。

尊親は、農民たちに「土地の開墾は大切だが、心の開墾はもっと大切だ。」と常に言い聞かせた。このことを「心田開発」と呼んだ。毎月二十日は午後から休業し、全員参加の会合（芋コジ）（水を張った桶の中に、泥の付いた芋を入れてかき混ぜると芋がきれいになることに由来）を開き、困難な開墾に挫けそうになる農民に、力を与えるための講話「心田開発」を行ったのである。

また、年に一度はよく働いた人、立派な行いをした人を移住民全員の投票により決定し表彰した。お金や鍬・鎌などの農具を与え、しっかりと評価することによって、農業への意欲も高まったという。

尊親は、火災、水害、地震などの災害時における救済策も整えた。被害の程度によって救済金を助成し、事故などで農作業の難しい者に対しては、組合として支援を行った。

厳しい開拓を可能にさせたのは、このような尊親のきめの細かな指導、特に精神面の支えが大きかったのである。

■二宮地区の現状

平成二十四年一月十八日、十九日の両日にわたり、里づくりアドバイザーで豊頃町産業課の神義宏氏に案内して頂き、豊頃町教育委員会や二宮地区の主な人たちに聴き取りを行った。

二宮地区は、八七世帯で人口二八八人、農家四二世帯の規模である。経営規模は他地区より小さいが、全体的に経営は健全であり、これは間違いなく尊親の影響であると皆口を揃えた。尊親の教えである「至誠・勤労・分度・推譲」の中の支出の限度を決めて（分度）、将来にも備える（推譲）ことは、大きな投資を行うことなく、健全な経

営を確保することにつながる。また、一生懸命よく働く（至誠・勤労）ことで、経営の持続化がもたらされる。尊親の教えは連綿として世代を経て引き継がれ、人々の血となり肉となって浸透しているようである。このことは、農業後継者の状況にも表れている。豊頃町自体十勝管内平均より後継者率が高いが、二宮地区は豊頃町平均より高い六九・〇％の後継者率になっている。二宮地区は東区、中央区、西区の三地区で構成されるが、特に東区と中央区（それぞれ九世帯、十四世帯）の後継者率が八五％を超えており、際だっている。

二宮地区の農家経営の健全さと人身の良好さが、後継者を育てる要因になっているようである。このことは、類似の事例をもってしても見ることができる。

千葉県旭市に鏑木宿内集落という二十数戸ほどの小さな集落があるが、ここは二宮尊徳と同時代の幕末に生きた農村指導者大原幽学（おおはらゆうがく）が指導して見事に荒廃から救った集落である。一五〇年ほど経った現在も集落内が良く修まり、人々は勤勉で一生懸命、農業経営は健全で、他の地区の住民に、あの集落は農業の精励さでは群を抜いていて、他の地区とは雰囲気が違うと今も言わしめる状況なのである。大原幽学は、「足るを知る」ことと「専業で農業に精励する」ことを教えた。「二兎を追う者は一兎をも得ず」と諭し、欲を出してあれこれ手を出すことを厳しく戒めた。この集落は本州に珍しく現在も専業農家が多く、後継者率も格段に高いのである。

二宮地区の人たちは、尊親の教えを風化させないよう様々な活動を行っている。入植してから五年後の明治三十五年に「報徳の教え」を実践する団体として『牛首別報徳会』が設立され、現在も存続している。二宮地区の住民全員がメンバーである牛首別報徳会は、尊親が最初にこの地域に足を踏み入れた日を探検記念日として顕彰したり、北海道報徳社（報徳の教えを全道に普及することを目的とする全道組織）主催の研修会に住民を派遣するなどして、教化に努めている。

二十代、三十代の若い後継者は、地区内にある報徳二宮神社に奉納する伝統芸能の獅子舞神楽（ししまいかぐら）を代々引き継ぎ、笛や太鼓、獅子舞踊りの練習に日夜汗を流している。非常に感銘を受けたのは、この若者たちも尊親を非常に尊敬していることである。若者の中には、幼少の頃、尊親の四男である二宮四郎氏（太平洋戦争後に富士山麓に「富士豊茂開拓農業協同組合」を発足させた）に抱かれた時のことを誇らしげに話す者もいて、親の代が尊親に感じる尊敬の念をその子どもたちも知らず知らずのうちに受け継いでいることが感じられた。

神社に奉納する二宮獅子舞神楽

牛首別報徳会としては、尊親の教えを日々の生活の中や農業経営に活かすよう普及することが目標であるとしているが、確実に達成されつつある。このような二宮地区の人たちは、とても絆が強く、他の地区より共同作業や助け合いの取り組みなども顕著に進んでいるとのことである。

町は新しい施策を始めようとする時には、二宮地区でまず試して、二宮地区でうまく行かなければ町内のどこで行っても失敗すると判断するそうであるが、至極納得である。

■おわりに

昔の農村指導者は、地域を再生するためには、人身の陶冶と経済的な活性化の両面から取り組んで成果を上げることが、真に地域を救う方策であると考えていた。農家経営の破綻を招く要因は、分を過ぎた投資や新しい事業に手を出してしまうこと、不測の事態に対する準備不足など様々であるが、それらは人間の欲望や怠惰などの精神的な側面に起因することが多い。だから、精神面の指導にも留意することが不可欠なのである。

しかし、これからの農業経営においては、農家が自ら販路開拓するなど消費者とより密接な関係づくりを行うことが求められることも事実である。二宮地区でお話しを伺った農家は、六次産業や産直などには今のところあまり興味が無いということだった。自分たちの農業スタイルを愚直に貫きながら、一生懸命安全・安心な農産物を提供していこうとする姿は、農家としてのあるべき姿を見る思いであった。尊親の「心田開発」からつらなる生きた哲学は、これからの日本人にとって最も必要とされるものかも知れない。

最後に、本調査にあたりご協力頂いた里づくりアドバイザーの神氏始め、教育委員会、産業課の関係職員の皆様、そして聴き取りに出席して頂いた牛首別報徳会の佐藤会長ら二宮地区の皆様に感謝申し上げます。

（文責　山田雅彦）

〔参考文献〕
『やさしい「報徳のおしえ」』（豊頃町教育委員会　H二十一・三・一〇発行）、二〇一〇豊頃町町勢便覧

トピックス

平成２４年度中山間ふるさと・水と土保全対策事業の一環として、次のとおり実施を予定しております。
詳しい内容・お申し込み方法などは、後日、各振興局等を通じてご案内いたします。

■地域づくり研修会

日　時：**平成２４年９月３日（月）１３：３０～１７：３０**
場　所：北海道大学クラーク会館　講堂
講演１：『農村の「地域づくり戦略」』（仮題）
　　講師　熊本大学文学部総合人間学科地域社会学　教授　徳野貞雄氏
講演２：『ミッション：地域の宝を活かし切れ～高校生レストランの奇跡に学ぶ～』
　　講師　三重県多気町まちの宝創造特命監　岸川政之氏

熊本大学　徳野教授
文学部ながら農村社会学を研究するユニークな先生。フィールドワークに長けた、豪快なトークにご期待ください。

多気町
　まちの宝創造特命監の岸川氏
TV ドラマとなった「高校生レストラン」の仕掛け人！その類い希な発想や着眼に注目です。

■現地研修

日　時：**平成２４年１１月１５日（木）～１６日（金）**
場　所：鶴居村
内　容：都市との交流や移住促進等の取組、女性起業家研究グループの活動、
　　地域資源を活かした地域づくり型観光　など

BOOKS

『かがり火～地域を学び、地域で遊ぶためのヒューマンネットワークマガジン～』
発行人：菅原歓一　　編集人：内山節

知る人ぞ知る熱い地域づくり情報誌である。1987 年に創刊されたこの雑誌は、財政難のため 2009 年５月に休刊。しかし、多くの読者からの熱心な声援があり、その年の 12 月に復刊したという今の時代では極めて珍しい、注目すべき雑誌である。

雑誌づくりの基本的な精神について発行人は次のように表現する。「本誌の底流にあるのは、社会の変化に一喜一憂する暮らしからの脱却です。目まぐるしい変化にアタフタしない生き方の術が、日本の地方の伝統的な暮らしの中にあったのではないか。いまそのような生き方と仕事、地域共同体のありようを学ぶべきではないかと考えています」

また、取り上げる人物などは、「個性的で面白い人物に登場していただこうというのであって、その人がたまたま何の肩書もない無名の人であっても一向に構わないという姿勢です」と、小気味良い。

確かに、「かがり火」に登場する人物は、こんな人物が日本にいるのかと驚くとともに、良く探してくるものだなと変に感心してしまう。しかし、それだけに、その人物の識見・力量は際だっている。信念を持って地域づくりに関わっている人たちに勇気を与えてくれる雑誌であることには間違いない。

■発行：かがり火発行委員会
　年間予約購読料（年６回配本）：9,000 円（送料、消費税込み）

【編集部から】

ふる水事業の担当者となり１年が経ちました。アドバイザーや地域づくりに関わる方のお話しを伺う度、その行動力や考え方に感心するとともに、地域づくりに最も重要なのは「ひと」だということを感じました。服部さんのお話にもあったように、どんなに良い制度を作ったとして、それを使える「ひと」がいないと意味がない。ふる水事業が、「ひと」づくりを担い、また、この「ひと」にとって必要な制度となるよう、アドバイザーの皆様からの御意見も頂きながら磨き上げていきますので、ご協力等よろしくお願いします。（コバ）